

注1 文献にあらわれる蟬に関する語彙は多いが、一般的には「蟬」、「蜩」、「蟋蟀」、「寒蟬」(『礼記』月令にある。)が使用されている。後漢以後次第に「蟬」や「寒蟬」に限定されていくようである。

注2 『詩経』大雅の蕩に「如蟬如螳」とあり、鄭玄の箋に「飲酒号呼之声、如蜩螳之鳴」と注する。

注3 松浦友久著『詩語の諸相』(『唐詩ノート』)二十七頁参照。
注4 引用の詩句は逮欽立輯校の『先秦漢魏晋南北朝詩』による。

(一九九六年十月三日受理)

(魏収「五日」)

蟬噪聞疑斷

蟬は噪ぎ^{さわ}聞いて断むを疑い

池清映似空

池は清く映^はえて空に似たり

(蕭愨「奉和悲秋应令」)

北朝においては現存する作品が乏しく、北齊ではこの二例があげられる。他に盧思道と唱和した作品とされる顔之推の「和陽納言聽鳴蟬篇」がある。

魏収の作は麦秋の季節がまだ終わらないのに、もう夏蟬の声を聞いたと述べるもので、初音に対する興趣に視点を置いている。蕭愨の作はさわがしく鳴く蟬声が一瞬止み、あたりに静寂がみなぎる情景を述べる。ともに蟬声に対する感情移入は認められず、季節を示す景物としてのみ用いられる。

最後に、北周についてみてみる。

竹動蟬爭散

竹は動きて蟬争いて散り

蓮揺魚暫飛

蓮は揺れて魚は暫らく飛ぶ

(庾信「詠畫屏風二十五首」其二十三)

風にゆれた竹の一瞬の動きに反応して鳴蟬が一斉に四方に飛び去っていく様子を描いたものである。屏風の絵を見て発想した情景であり、蟬声に対する作者の感情は吐露されていない。

結 び

以上、先秦から六朝末までの詩賦や楽府中で吐露された蟬声に対する感情について言及してみた。『詩経』においては蟬(蟬声)も季節を示す景物の一つとして捉えられるだけで、個人的な感情の反映は認められない。『楚辞』になると、前述したように「悲秋」の觀念が生まれ、秋という季節そのものを感傷的に詠うために蟬声が利用されている。次の漢代も『楚辞』の影響を受けて、同様に感傷的に詠う秋の景物として蟬声は意識されている。魏晋時代になると、初めて蟬声自体が注目されるようになり、作者の感情が蟬声を通して吐露される。つまり、「哀蟬」、「寒吟」、「哀し」等とあるように、直接憂愁や悲哀の感情を汲取るようになる。南朝時代になると、例えば、梁の鍾嶸が文学評論書である『詩品』の序中に「春風、春鳥、秋月、秋蟬、夏雲、暑雨、冬月、祁寒、これ四候のこれを詩に感ぜしむる者なり」と述べるように、人の心に詩的感興を呼び起こす自然の景物として秋蟬があり、素材として留意されていたことがわかる。かくして南朝において蟬声に対する新しい形容語が色々と工夫されてくる。その要因として秋の自然や景物を美的対象として客観的に見る感覚、さらにはそれらを趣味的あるいは娯楽的に楽しむという風潮の発達したことが指摘できる。その結果、文学も影響を受け新奇な表現技法の試みが盛んになったといえる。北朝では南朝文学の影響を受けているのにもかかわらず蟬声に関する詩賦が乏しい。北方の寒冷なる気候のため蟬の活動期が限定され、そのため文学の対象になりにくい面があったのではないかと思われる。盧思道が蟬声を悲しみ、望郷の思いにふけるのも、魏晋以来の詩の伝統に起因するものであろう。

江淹は秋の終りの情景を、蟬声が聴かれなくなった情景をもって詠う。病に臥す身にとって、衰微していく景物の一つとしての蟬声に対して、単なる景物としてではなく、そこには傷みの感情がこめられている。さらに、秋に対する自らの感傷をより印象づけるために「蟋蟀号ぶ」と蟬声の激しさに留意する。呉均は蟬声を通して別離の憂いや秋の悲傷の思いを吐露する。また、「蟬涼」は先例に存在せず、蟬声を涼しと形容するのはこの「秋念」の詩が最初である。王籍は蟬声のさわがしさを通して、それが逆に静寂をより深めるものであることを強調する。先例にない新しい発想による興趣といえる。蕭子範はかまびすしく鳴く蟬声を通して辺境にある遊子の心情を思いやっている。これは前述した宋の謝靈運の「燕歌行」を意識した作であると考えられる。

次に、陳代についてみる。

猿啼知谷晚

猿啼いて谷の晩を知り

蟬咽覚山秋

蟬咽しせびて山の秋を覚ゆ

(徐陵「山池応令」)

別燕差池自有返

別燕は差池とびかい自から返る有り

離蟬寂寞詎含情

離蟬は寂寞としてなんぞ情を含まん

(江總「宛転歌」)

山階步皎月

山階に皎き月は歩さし

澗戸聴涼蟬

澗戸に涼蟬を聴く

(同「明慶寺」)

雀驚疑欲曙

雀驚さわげば曙あけんとするを疑い

蟬噪似含涼

蟬噪さわげば涼を含むに似たり

(同「侍宴瑤泉殿」)

寒蟬噪楊柳

寒蟬は楊柳やうりうに噪さわぎ

朔吹犯梧桐

朔吹きたかぜは梧桐を犯す

・ ・ ・ ・ ・

寂寞尽秋風

寂寞として秋風尽く

(張正見「賦新題得寒樹晚蟬疎」)

絲調聴魚出

絲調 魚の出ずるを聴き

吹響聞蟬声

吹響 蟬声しせより聞かなり

(後主叔宝「七夕宴玄圃各賦五韻」)

愁人兮易驚

愁うる人は驚き易く

静聴兮傷情

静聴すれば情を傷ましむ

(褚玠「風裏蟬声賦」)

徐陵は蟬声を「咽」という語彙で表しているが、先例の無い用例である。さらに「猿啼」と対比して用いられるのも最初である。夜猿の鳴き声が当時すでに悲哀に満ちたものとして詩人に認識されていたといわれる。彼もこうした夜猿の声に対するイメージに重ねて、蟬声を「声のつまるような鳴き声」と形容したものと思われる。江總、張正見や褚玠の作は秋を感傷的にみる伝統的な觀念である「寂寞」などの感覚で蟬声を詠ったものである。また、江總は「涼蟬」、「含涼」といった語彙を用いているが、蟬声に涼しさを感じる感覚は梁の呉均の「秋念」に始めてあらわれる。後主叔宝は宴席で奏せられる管楽器の響きが夜の深まりとともに、次第に静かになつていく有様を述べたもので、その演奏の静かさを強調するものとして蟬声を用いている。陳代においては蟬声に対する特に新しい表現はみられない。

次に、北朝の北斉についてみる。

麦涼殊未畢

麦涼ことにいまだ畢おわらざるに

蛸鳴早欲聞

蛸鳴つと早に聞かんと欲す

情を傷ましめる景物として用いられている。顔延之や謝莊は「夜蟬」と詩中に述べるように、夜の蟬声に注目している。先例の中に夜蟬を詠うものは見当たらない。さらに、夜蟬の声を「清らか」とするのものは謝莊の新感覚であるといえる。宋代に入ると、詩人たちが新奇な表現の工夫に努力したことが証される。

次に、齊代について述べてみる。

地迴聞遙蟬 地は廻く遙かな蟬を聞く
天長望帰翼 天は長きく帰翼を望む

(謝朓「答張齊興」)

孤蟬已散 孤蟬すでに散じ
去鳥成行 去鳥は行を成す

(同「遊後園賦」)

この作はともに秋の景物として詠われ、「飛ぶ」という行動の類似を通して、雁や燕などの鳥と対比的に用いるという技法の先例を継承しているのみで、表現技法の工夫はみられない。ただ、「孤蟬」という表現は先の顔延之の「寒蟬賦」に「孤引」とあり、孤独に鳴き続ける蟬の用例があるのみである。

次に、梁代についてみてみる。

涼草散螢色 涼草 螢色を散じ
衰樹歛蟬声 衰樹 蟬声を歛む

(江淹「卧病怨別劉長史」)

秋至白雲起 秋至りて白雲起こり
蟬蛄号庭前 蟬蛄 庭前に号ぶ
中心有所思 中心 所思有り

「蟬声」について(矢嶋)

虚堂独浩然

虚堂にひとり浩然たり

樹青草未落

(同「效阮公十五首」其十二)
樹は青く草はまだ落れず

蟬涼葉已危

蟬は涼しく葉すでに危うし

(吳均「秋念」)

昼蟬已傷念
夜露復沾衣

昼蟬すでに念を傷ましめ
夜露また衣を沾らす

(同「雜絕句四首」其二)

落葉思紛紛
蟬声猶可聞
・ ・ ・ ・

落葉 思いは紛紛たり
蟬声なお聞くべし

所憂別離意

憂うる所別離の意

所露下霑裙

白露下りて裙を霑らす

(同「贈鮑春陵別」)

蟬噪林逾靜
鳥鳴山更幽

蟬噪いで林いよいよ静かなり
鳥鳴いて山更に幽かなり

(王籍「入若耶溪」)

流音繞叢藿
余響切高軒

流音 叢がる藿を繞り
余たの響 高軒に切まる

借問辺城客

借問す辺城の客

傷情寧可言

傷情なんぞ言うべけん

(蕭子範「後堂聽蟬」)

梁代については、五十五年という短い王朝であったにもかかわらず現存の作品数が多く、そのため鳴蟬を詠う詩句も多く、右の引用例以外におよそ十例がある。それは基本的には秋の景物としてのみ詠まれている。

哀蟬無留響

哀蟬は響きを留むる無く

叢雁鳴雲霄

叢雁は雲霄に鳴く

(陶淵明「己酉歲九月九日」)

傳玄や陸機は秋の景物の一つとして蟬声を述べるのみで、それに対する意識的な働きかけは認められない。それに対して、傳咸は鳴き声を哀しいものとして聴き、秋日の悲傷の思いをより印象づける景物としている。蟬声を直接に「哀し」という感情で表現する例はこれが最初である。また、潘岳は「寒音」や「寒吟」という詩語を使用しているが、鳴き声を「寒」という形容詞で示す例も最初である。「哀」や「悲」という形容語に比較して、作者の凋落の秋に対する慨然たる思いが寒むざむと鳴く蟬声によってより強調される。潘岳の新しい観点であるといえる。張載や江迢は尾聯において秋の景物に誘発されて感ずる秋の季節に対する感慨を吐露している。このような感慨を催すものとして蟬声が使用される技法はすでに三国時代の魏の曹植や王粲の詩に認められ、その伝統を伝えるものといえる。孫楚と陶淵明は「悲鳴」や「哀蟬」という詩語で、先例にならって蟬声に自らの感情移入を行っている。このように、晋時代以後、秋に対する憂愁の感情がより以上に自然そのものに投影され、それは逆に感傷的に自然を眺めることになってゆく。その結果、自然の一景観である蟬声に対しても、悲哀の感情で捉えるという風潮が次第に広まっていったと思われる。

次に、南朝の宋の時代についてみる。

秋蟬噪柳燕辞楹

秋蟬は柳に噪ぎ燕は楹を辞す

念君行役怨迎城

君が行役を念いて迎城を怨む

(謝靈運「燕歌行」)

蕭瑟含風蟬

蕭瑟たり風を含む蟬

寥唳度雲雁

寥唳たり雲を渡る雁

(謝惠連「秋懷」)

夜蟬当夏急

夜蟬夏に当りて急しく

陰虫先秋聞

陰の虫は秋より先に聞く

(顏延之「夏夜呈從兄散騎車長沙」)

始蕭瑟以攢吟

始めは蕭瑟として以て攢り吟き

終蟬媛而孤引

終りは蟬媛として孤引す

(同「寒蟬賦」)

鹿鳴在深草

鹿鳴いて深草に在り

蟬鳴隱高枝

蟬鳴いて高枝に隱る

(鮑照「代別鶴操」)

空林響鳴蜩

空林に鳴蜩響き

高松結悲風

高松は悲風を結ぶ

(同「松柏篇」)

樹末颯而澗音

樹にいまだ颯かざるに澗の音あり

澗鳥鳴兮夜蟬清

澗鳥鳴いて夜蟬清らかなり

(謝莊「山夜憂」)

謝靈運は秋の時節を迎え、遙かな辺境の地にてより一層望郷の念にかられている筈であろう友人への思いを吐露するが、その思いを誘発する景物として秋蟬の声が用いられる。謝惠連や顏延之は蟬声に対して「蕭瑟」という形容詞を用いて表現している。この語句はこれまで秋風のもの淋しく吹く様を表す意味から、もの寂しいというイメージを示す語として使用されている。蟬声そのものに用いたのは彼らの新しい感覚によるものといえる。鮑照の「代別鶴操」は高潔な人士の有様を詠うもので、蟬声よりも蟬のもつ象徴性に視点が置かれている。また、「松柏篇」は病床にある身の傷みを詠んだ作であり、作者の心

感物傷我懷
撫心長歎息
物に感じて我が懷いを傷ましめ
心を撫でて長く歎息す

(曹植「贈白馬王彪」)

商風夕起悲彼秋蟬
變形易色隨風東西
商風は夕べに起り彼の秋蟬を悲しましむ
形変わり色易り風に随いて東に西に

(曹叡「步出夏門行」)

寒蟬在樹鳴
鶴鵠摩天游
客子多悲傷
淚下不可收
寒蟬は樹に在りて鳴き
鶴鵠は天に摩く遊ぶ
客子 悲傷多く
涙下りて収むべからず

(王粲「從軍詩五首」其五)

この時代になると、前述した繁欽が秋という季節に感じて悲吟すと述べるように悲秋の觀念はよりはつきりと詩歌の中で詠われるようになっていったといわれる。曹植は秋風の到来を寂寥たる思いで受けとめ、自らの心の傷みを詠う。その要因の一つに秋蟬の声をあげる。王粲は遠く故郷を離れて異郷の地にある兵士の嘆きを大空の鳥や蟬声によつて強調する。特に、曹叡は秋の凋落の早さに深く感じ入り、秋にのみ一瞬の生命を輝かして消える秋蟬に心ひかれ、間接的ながらそれに悲哀を感じとっている。秋蟬が悲しむのは直接には秋風を要因とするが、裏面には作者の感情、つまり作者の悲思なる感情が託されているといえる。

次に、西晋および東晋時代についてみてみる。

蟬鳴高樹間
野鳥号東廂
蟬は高樹の間に鳴き
野鳥は東廂に号ぶ

(傅玄「雜詩三首」其一)

奚厥声之可哀
秋日悽悽兮
なんぞその声の哀しむべく
秋日悽悽たり

(傅咸「鳴蜩賦」)

鳴蟬厲寒音
時菊耀秋華
鳴蟬は寒音厲しく
時りの菊は秋華に耀けり

(潘岳「河陽縣作二首」其二)

蟬嘒嘒而寒吟兮
雁飄飄而南飛
陽鳥收和響
寒蟬無余音
・・・・・
哀人易感傷
触物增悲心
蟬は嘒嘒と寒吟し
雁は飄飄と南に飛ぶ
陽鳥は和らげる響きを収め
寒蟬余かの音無し

(同「秋興賦」)

涼風繞曲房
寒蟬鳴高柳
涼風は曲房を繞り
寒蟬は高柳に鳴く

(陸機「擬明月何皎皎」)

當仲夏而始出
據長條而悲鳴
仲夏に當りて始めて出で
長き條に據りて悲しみ鳴く

(孫楚「蟬賦」)

寒蟬向夕号
驚飈激中夜
寒蟬は夕べに向かつて号き
驚き飈は中夜に激し

感物增人懷
悽然無欣暇
物に感じて人 懷いを増し
悽然として欣ぶ暇無し

(江道「詠秋」)

「蟬声」について(矢嶋)

燕翩翩其辞埽兮

燕は翩翩として其れ辞し埽り

蟬寂漠而無声

蟬は寂漠かにして声無し

雁靡靡而南遊兮

雁は靡靡として南に遊び

鵲鷄は啁晰而悲鳴

鵲鷄は啁晰として悲しみ鳴く

(宋玉「九弁」)

宋玉は蟬声がすでに聞かれなくなった情景を述べることによって秋の到来を詠っているのであるが、鵲鷄という鳥の鳴き声に対しては作者の感情移入が認められるものの、蟬声にはそのような感覚は働いていない。宋玉はこの「九弁」の中で「悲しきかな秋の気たるや、蕭瑟たり草木揺落して変衰す」と述べ、秋の季節を悲しきものとして詠った最初の詩人である。それ故、感傷的に自然を眺める意識が働いており、声無き蟬声にもこの季節のものの哀しさを間接的に示す景物であるとする認識はあったと思われる。

次に、前漢時代についてみる。

蟋蟀鳴兮啾啾

蟋蟀鳴いて啾啾たり

歲暮兮不自聊

歲暮自から聊します

(『楚辞』淮南小山「招隱士」)

微霜兮眇眇

微霜は眇眇にして

病歿兮鳴蜩

病歿れし鳴蜩あり

(同 王褒「九懷」通路)

林不容兮鳴蜩

林は鳴蜩を容れず

余何留兮中州

余何ぞ中州に留まらん

(同 「九懷」尊嘉)

か飲まないということによって)として描き、蟬声それ自体には留意していない。さらに、彼は「洞簫賦」で「秋蜩は食わず樸を抱いて長吟し、玄猿は悲嘯し其の間に捜し索む」と述べ、猿声に対しては悲哀の感情で捉えるが蟬声についてはその鳴き声に留意するに過ぎない。また後漢時代には、次のような詩句がある。

白露沾野草

白露は野草を沾おし

時節忽復易

時節たちまちまた易る

秋蟬鳴樹間

秋蟬は樹間に鳴き

玄鳥逝安適

玄鳥は逝りいずくにか適く

(「古詩十九首」其七)

陽蜩鳴其南枝

陽蜩は其れ南枝に鳴き

寒蟬噪其北陰

寒蟬は其れ北陰に噪がし

秋風忽其將來

秋風たちまち其れまさに来らんとし

咸感節而悲吟

咸感節に感じて悲吟す

(繁欽「桑賦」)

「古詩十九首」は秋の景物に感じて友人が自分を捨て去ったことを思い出す作品であるが、季節の変り目を示す景物として蟬声は述べられるのみである。繁欽の作は夏の終わりに秋の気配を敏感に感じとり、鳴きたてる秋蟬に時間の推移の早さに対する思いが重ね合わされ、「悲吟」する秋の景物の一つとして蟬声を意識していると思われる。次に、後漢末から三国時代の魏についてみる。

秋風發微涼

秋風は微涼を發し

寒蟬鳴我側

寒蟬は我が側に鳴く

原野何蕭條

原野何ぞ蕭條たり

白日忽西匿

白日忽ち西に匿る

・・・・

淮南小山は歲暮における憂愁の思いを蟬声によって間接的に述べる。王褒は蟬の命のはかなさや高潔な人士の比喩(蟬は高所に居り清露し

「蟬声」について

矢嶋 徹 輔

一

聴 鳴 蟬⁽¹⁾ 篇

聴鳴蟬

鳴蟬を聴く

此聴悲無極

これ聴けば悲しみ極まり無し

群嘶玉樹裏

群れては玉樹の裏に嘶びなき

廻噪金門側

廻りては金門の側に噪すし

長風送晚声

長風は晩声を送り

清露供朝食

清露は朝食に供す

晚風朝露実多宜

晚風朝露まことに宜多く

秋日高鳴独見知

秋日高鳴して独り知らる

輕身蔽数葉

輕身は数葉に蔽われ

哀鳴抱一枝

哀鳴して一枝を抱く

流乱罷還続

流乱罷みてまた続き

酸傷合更離

酸傷合まりて更に離る

暫聴别人心即断

暫く聴けば別人の心すなわち断たれ

纔聞客子淚先垂

纔めて聞けば客子の涙先ず垂る

故郷已超忽

故郷すでに超忽たり

空庭正蕪没

空庭まさに蕪没せんとす

.....

この詩は北斉朝（五五〇―五七七）の盧思道の作である。五七七年の秋、北周の侵攻によって北斉は滅亡し、その際は顔之推や陽休之等とともに、北斉の著名な文人として遇されたとはいえ北周の都長安に虜囚として送られた。この時蟬声に心を動かされ、彼らと望郷の思いを吐露したものである。

蟬といえはやはり夏を象徴する虫と考えるのが一般的であり、噪がしく鳴きたてる様子は厳しい陽光の時節にふさわしく、その故に夏蟬の声を悲哀の感情で捉えるということはまずないであろう。所が、思道は秋蟬を詠っている。元来草木の凋落する秋に対しては秋という季節そのものにとりもなう感情として悲哀とか寂寥といった感情がしばしば文学の世界で詠われる。中国では『楚辞』の中で初めて秋の景物を通して表現され、それに人生の種々の感慨が付加されるようになり、その結果秋を悲しとする感情が次第に一般化し、それが後世の詩の伝統となつてゆく。思道が秋蟬の声に悲哀を感じたのも、このような伝統的な認識によるものと思われる。そこで、蟬声に対する感情が詩賦や楽府にどのように述べられているのか、先秦より六朝末までの作品を通して概説してみるのがこの小論である。

二

詩の中で蟬声が詠われる最も古い例としては、『詩経』豳風の「七月」に「五月鳴蜩あり」、小雅の「小弁」に「鳴蜩嘒嘒たり」とあり、五月に蟬が鳴き、またその声はか細いという。『詩経』の時代にはすでに四季や一年十二か月の区分が成立しており、農事暦の五月を示す景物として述べられるもので、蟬声に対する関心²⁾は認められるが、季節にとりもなう特定の感情はまだ意識されなかったと考えられる。

次に、戦国時代から後漢時代の作品が含まれる『楚辞』の詩句をあげてみる。

「蟬声」について（矢嶋）